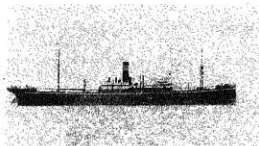
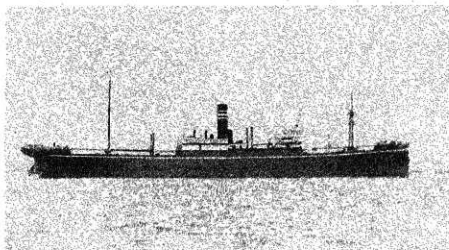


種子島と戦争



奥村 学

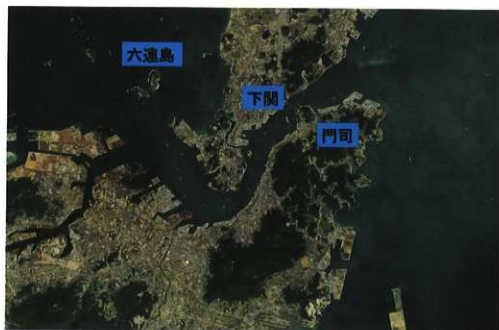


りま丸 日本郵船 6,989総トン 大正9年4月25日竣工

昭和19年2月7日0800 独立混成旅団19旅団約兵3,241名を乗せ高雄に西村門司港を出发。六連泊地でモタオ2船団を編成、船団の基準船となる。8日2220砲台緯31度05分、東経127度31分(草場島西方100カイリ付近)において米潜水艦SS-279 Snookから、右舷2機機、機関室付近、船尾へそれぞれ魚雷をうけ燃発、3分後に沈没。兵員2,696名、乗務員9名、便乗者4名、船員56名合計2,765名戦死

モタ02船団

	船名	目的地	乗員、荷物等	備考
1	りま丸 (8989屯、日本郵船)、基準本船	サンフェルナンド(フィリピン)	部隊3241名	沈没 2765名死亡
2	白根山丸 (4739t、三井船舶)	香港	部隊3000名	大破 43名死亡
3	燕洋丸 (9418t、南洋海運)	昭南(シンガポール)	部隊	
4	第五兵装丸 (1186t、共栄タンカー)		空船	救助
5	南嶺丸 (2407t、東亜海運)	パラオ	部隊	
6	打出丸 (5286t、太平汽船)	パラオ	部隊補充員	
7	大敬丸 (4740t、大坂商船)	パラオ	部隊2421名	
8	東神丸 (1917t、興田商店)	パラオ		
9	扶餘丸	ハルマヘラ(インドネシア、モルッカ諸島)	軍需品	
10	藤川丸 (2829t、川崎汽船)	ハルマヘラ	軍需品	
11	第三東洋丸 (995t、沢山汽船)	昭南(シンガポール)	空船	
12	てしお丸 (2840t、三井船舶)	パラオ	便乗者474名、軍需品	
13	旺洋丸 (5458t、東洋汽船)	昭南		
14	鏡海丸 (2827t、東亜海運)	パラオ		
	雲(水雷艇) (1162t)	(護衛艇)		掃海 救助
	雲38号哨戒艇 (960t)	(護衛艇)		掃海 救助



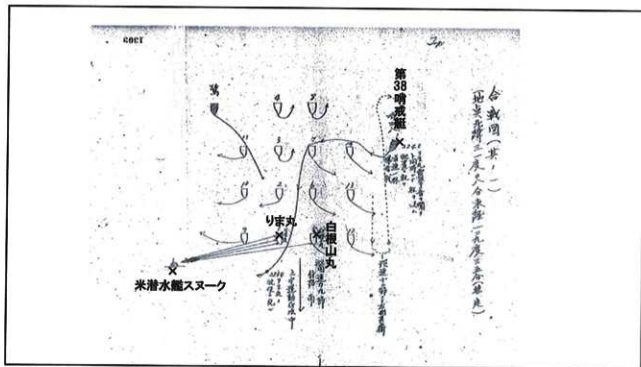
リマ丸沈没地点

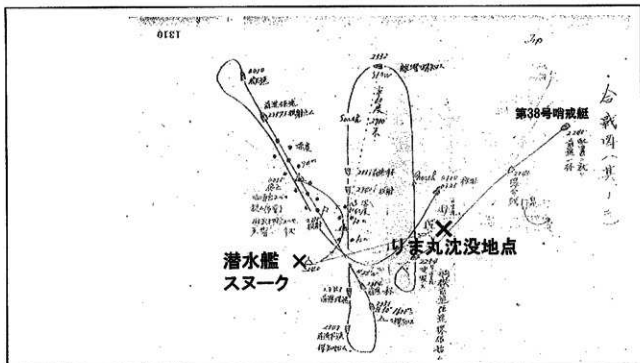


米軍資料
北緯31度05分 東経127度31分



日本側資料
北緯31度05分 東経129度37分

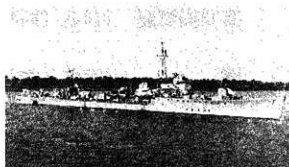
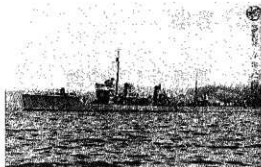




第38号哨戒艇鷺 (1162 t) 鷺 水雷艇 (960 t)

(同型艦)

昭和12. 7. 31竣工



■掃海**第38掃海艇**

潜水艦「スヌーク」に対して、

1回目 爆雷6個（水深60m）

2回目 爆雷13個（水深60～90m）

（約2週にわたる油の浮遊を認む）

2月9日朝 飛行機で海面掃蕩

第8長運丸と共に掃蕩

潜水艦は不明

■救助

第5共栄丸 150名救助

第38掃海艇 170名（内4名死亡）救助

鷺 437名（内7名死亡、重傷者1）救助

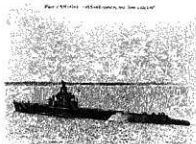


モタ0 船田参加船のその後

船名	経緯	場所
1 りま丸	昭和19.2.8 米潜水艇「スヌーク」の雷撃 沈没	羅摩半島沖
2 白根山丸	昭和19.10.18 米潜水艇「トラトン」の雷撃 沈没	フィリピン沖
3 旗浮丸	昭和19.9.12 米潜水艇「シーライオン」の雷撃 沈没 連合国捕虜1315名乗船、船員9名、連合国捕虜1179名死亡	香港 南沖
4 第五共栄丸	昭和20年8月21日 触雷 沈没	関門西口
5 南強丸	昭和19.10.14 米潜水艇「アングラー」の雷撃 沈没	フィリピン近海
6 打出丸	昭和19.3.2 米潜水艇「サーゴ」の雷撃 沈没	パラオ沖
7 大敬丸	昭和19.2.19 米潜水艇「グレイバック」の雷撃 沈没	台湾 高雄沖
8 東神丸	昭和19.2.19 米潜水艇「グレイバック」の雷撃 沈没	台湾 高雄沖
9 扶輪丸	沈没	
10 藤川丸	昭和19.3.30 米潜水艇「ダーター」の雷撃 沈没	ニューギニア北沖
11 第三東洋丸	昭和20.6.11 座礁	台湾 近海
12 てしお丸	昭和19.3.30 米第58機動部隊艦隊戦艦による空爆 沈没	パラオ沖
13 旺洋丸	昭和19.10.20 米潜水艇「ハンマーヘッド」の雷撃 沈没	ブルネイ近海
14 銀海丸	昭和19.11.18 米潜水艇「ビート」の雷撃 沈没	台湾 済州島沖
鷺(水雷艇)	昭和19.11.8 米潜水艇「ガンネル」の雷撃 沈没	フィリピン沖
第38哨戒艇	昭和19.11.25 米潜水艇「アトル」の雷撃 沈没	フィリピン北沖

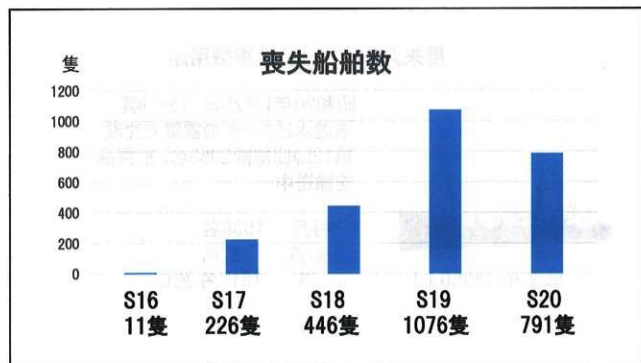
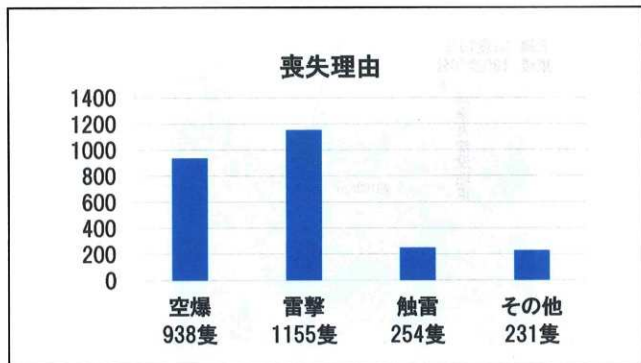
米潜水艦「スヌーク」

- ・ 1042 (昭和17年) 8.15 進水
- ・ 排水量 水上1525トン 水中 2424トン
- ・ 9回の哨戒
 - (りま号雷撃は、第5回目の哨戒時)
 - 日本の第38哨戒艇による21発の爆雷をかわす
- ・ 昭和20年4月9日または4月14日の戦闘で撃沈される。
- ・ 2年半の現役中に、17隻の敵艦を撃沈
- ・ 第2次世界大戦の戦功で7個の従軍星章を受章



太平洋戦争時の喪失船舶

- ・ A 陸軍徴用船 B 海軍徴用船 C 自営船 D 不明・その他
(軍の戦闘用船舶、輸送船等は含まない)
- 昭和16年12月8日～昭和20年8月15日(100屯以上の船舶、鋼船)
- ・ 喪失船計 2,578隻
 - 内訳 A 660隻 B 799隻 C 1,064隻 D 55隻
- ・ 漁船、機帆船を含めると 約7000隻
- 船員の損耗率 43% (陸軍 20%、海軍16%)



北緯 31度18分
東経 130度10分

馬來丸沈没地点

約100Km



馬來丸(マレー丸)陸軍徴用船

昭和20年1月25日 13:50頃
米潜水ピクーダの雷撃で沈没
第12師団部隊2055名、軍需品
を輸送中



馬來丸 (4556 t)

將兵	1536名
船員	37名
計	1612名 死亡

「種子島高校創立 60 周年記念誌」より (S62)

当時の思い出・・・・・・・・・・上妻 紀夫

・・・・・・・・

日本兵士の漂着(253体) 輸送船「りま丸」が将兵 2,500 人を南方へ輸送中、昭和 19 年 2 月 8 日福江島と甌島との中間の洋上で敵潜水艦に撃沈され、その将兵の一部が同年 2 月 13 日西之表市、馬毛島の西海岸に漂着した。

屋久島の北西海岸にも漂着したと聞いた。

救命具をつけた完全武装の兵士たちであった。子供や奥さん、母親の写真を身に着けた人、中には銃をしっかりと握ったままの人、様々で、その胸中を察すると、涙なくして茶毘に付すなどできることではなかった。

遺体は、特設警備第 203 大隊田代碩市隊長の率いる兵士、西之表消防団、種子島中義勇戦闘隊、国防婦人会が、遺留品は、種子高女子奉仕隊が、それぞれ責任をもって丁寧に処理した。

兵将は歩兵・工兵・野砲・航空兵・軍属(3)。輸送指揮官が藤大尉。「実弾の一発も撃たず、断腸の思いで戦死なされた将兵の皆様には哀悼の意を表し、ご冥福を祈ります」

・・・・・・・・

「種子島を語る」(第 2 号)より (S52)

戦時種子島中学校回顧録・・・・・・・・・・東 兼利

・・・・・・・・

死体処理 20 年 2 月、りう丸が種子島西海上で撃沈され、兵隊の死体が流れてきた。種子島中生徒には全員非常呼集がかけられ、竹棒などで死体を寄せて集めに行った。

流れ着いた兵隊は鉄甲をかぶり銃を持ち完全武装であった。中には子どもの写真を持った人、多分奥さんと思われる若い女の人の写真を持った人、抱き合っている人、上官をかばうように死んでいる人、本当に涙なくしては見られない有様であった。

一応死体は現在の農協の所にあった藪検場に収容され、私達下級生は甲女川の川べりに深さ 1 メートル 50 センチ位の穴を延々と掘った。

当時は、現在の鴨女町の住宅街はなかった。夜になって上級生などが、私達の掘った穴にたきものを並べ、軍用のガソリンをかけて死体を焼いた。

馬毛島に流れ着いた兵隊は、かなりの所まではい上がっていたということであるから、馬毛島では生きて流れ着いた兵隊もいたと思われる。しかし馬毛島は無人島で助ける人もなく凍えて死んだのではないかと思う。

屋久島に上がった兵隊はかなり生き残った人がいて、その人達が遺骨を引き取りにきた。

聞くところによると、熊本の兵隊で昭和30年頃までいくらかの遺骨が西岸寺に残っていた
そうである。・・・・・・・・

戦時下の西之表町防団・・・・・・・・・・高崎 清市

・・・・・・・・

20年の2月12日、13日頃、大崎の海岸から島間一帯にかけ、百余体の日本兵の遺骸が
打ち上げられたことがあった。北西の季節風の強い寒い日であった。

警防隊は手分けしてこの遺体の収容につとめた。現在の農協の裏にあった大きな乾蚕倉庫
の土間に全部の収容を終わったのは夜の11時過ぎであった。

その翌日馬毛島にも100人近い遺体が打ち寄せられているとの知らせがあり、緊急に団
は高崎副団長、黒岩分団長等約20名、松島の部落会の有志数名、洲之崎の国防婦人会員
7、8名当時の郷土部隊から数名、佐藤万徳寺住職等、折から入港していた木炭運搬の機帆
船に頼み馬毛島に渡った。

池田小屋と能野、住吉小屋の周辺に100有余の遺体が打ち上げられていた。前日西之表
中心の収容した遺体は殆どが凍死したものと見られ、なんの傷もなかった。しかし、馬毛島
の場合は強い北西の季節風で波が高く、すべての遺体が巖にぶつかったものか傷だらけの
無惨なものであった。

池田の小屋のはずれの高い岡の上に大きな穴が掘られ、一人一人の認識票によって片方の
腕を現和出身の軍曹か曹長だったか円ビ打ち落とし名札をつけて、残りは頭をそろえて土葬
した。

佐藤万徳寺住職は北西の風の強く吹き荒れる中を約5時間、警防団が担荷で運んできた一
人一人の遺骸に丁寧に説経された。

他方能野小屋の方も、はずれの小高い砂山に約40人を葬った。・・・・・・・・

「特設第55機関砲隊 種子島戦記」より (S63)・・・・・・・・川添利男

・・・・・・・・

しかし島民が戦局の不利を実感したのは、昭和20年2月で、南方の戦場に出陣する兵員、
武器を輸送中の船舶が、潜水艦で撃沈されて、各種燃料のドラム缶や救命胴衣を着用のまま
沢山の将兵が、西海岸に死体で漂着してからである。・・・・・・・・